

「協働型サービslラーニング」をめざす教科の 「社会人基礎力」を育成する教育プログラムとしての可能性

川田 博美

Possibility as an educational program which raises "basic ability to work in society" of the subject which aims at "collaborated type service learning"

Hiromi KAWADA

目 的

1. 背景

2007年度からカリキュラムに設定して、1年から2年までの4セメスタを利用することにより本格稼働を開始した、教科『バーチャル・カンパニー演習』(入門・基礎・実践・応用)は、「ITを仲立ちとした人と人との各種交流プログラム」の一つとして、実際に「人と人とを接触させる機会」を学生に提供するために考案したものである。

独自のイベントの開催を目標として授業展開するようになってから2年が経過し、3年目となる2009年度からは、この教科の意義をさらに高めるために『協働型サービslラーニング』を目指している。『協働型サービslラーニング』という言葉は、日本福祉大学など多くの大学などで利用され始めた言葉で、たとえば日本福祉大学社会福祉学部では、平成20年度の文部科学省の『質の高い大学教育推進プログラム』に、『協働型サービslラーニングと学びの拠点形成』というタイトルでその新たなプログラムを提案している⁽¹⁾。この取り組みでは、体験的な学習が、学生の学習意欲の向上やキャリア形成にとって有効であるとして、学生と担当教員、NPO法人との協働によるプログラムを実施している。具体的には、全員履修の教科「社会福祉基礎演習」において、『サービslラーニング』という教育方法を採用し、地域貢献にもとづく実践的で体験的なグループ学習を展開するものである。そのなかで学生個人の「自己形成力」(まなぶ力(学習意欲)、つながる力(対人関係能力)、やりとげる力(問題解決能力))を高めるためのプログラム開発を行うとしている⁽²⁾。

さて、『協働型サービslラーニング』の「サービslラーニング」を簡単にいうと「学生が自発的な意思に基づいて、一定の期間、無償で社会奉仕活動を体験し、知識として学んだことを体験に活かし、また体験から生きた知識を学ぶ」ことである。サービslラーニングとはひと言で、「教室の知と社会実践をリンクさせる新しい教育プログラム」と要約できる。例えば第1に「技術協力」「持続可能な開発」「協働」「自治」といった概念、理念、理論を、それが実際に働いている社会の現場で経験することで、文字から学んだ知識を生きたものにし、理解を深化させる試みである。第2に、サービslラーニングは、何よりも学生の「自発的な意志」を重んじる。その提供者は、できるだけ各人の興味と能力にあったサービスの機会を提供できるようなメニューを増加させ、各学生自らが問題意識をもち、解決すべき課題を発見し、コミュニティに分け入り、社会貢献と奉仕の意欲をもつことができるように配慮する必要がある。いわば「自

発性」と「ボランティア精神」がサービスマーケティングの核心である。第3に、サービスマーケティングは、経験の「ふり返し (reflection)」のプロセスを強調し、この点で単なるボランティア体験とは異なる。経験自体には快・不快が付き物だが、それは日誌づけの励行など各人のふり返しを通して意味を増し、経験知として人格形成の血肉となり、既存の知識に修正を迫る再理論化の契機として作用する。こうしてサービスマーケティングのプログラムは、知識と実践のリンク、自発的な奉仕、ふり返しという3本の糸がより合わさり、相互補完的に強めあう⁽³⁾。

その遂行に必要なのは、(1) 地域のニーズを満たした課題解決を目指すこと。(2) 地域での活動を教科学習に取り込むこと。(3) 学生が自ら考え、振り返る時間・機会をもつこと。(4) クラスや学校の枠組みを越え、地域と連動した学習の展開があること。(5) 他者を思いやり、いたわる感性を養うこと、である。その効果的な活動のためには、(1) 結果が明確であり、集団の目標に関連していること。(2) プロジェクトが考えや技術の習得・応用の刺激になること。(3) 高度な思考と知識の構築が促されること。(4) 学生はコミュニケーションを通して情報や知識の交換をすること。(5) 国や地域のスタンダード (規範) に関係していること、が求められる。そしてその活動のテーマが、学生の興味をそそり、主体的に活動させ、自らを成長させるものであるべきである。現実的には、明確な目標があり、学校や社会の本質的なニーズに合っていること。そして最終的に、学生自身や周囲の人に大きな影響を与えることが求められる。そのためには、(1) 目標が明確に定義されていること。(2) 本質的なニーズに合致していること。(3) 課題と結果が意味あるものであること、が必要となるのである⁽¹⁾。

サービスマーケティングを支える重大な構成要素は、次のようになる。(1) プロジェクトの選択・構想・実行・評価に学生の意見を最大限に活かすこと。(2) 当事者・実行・結果の多様性を尊重すること。(3) 地域とのコミュニケーションやふれあい、パートナーシップや協力を奨励すること。(4) 学生に自分の役割、技術、必要な情報、注意事項、共に働く人への思いやりを理解させること。(5) 学生の反応や気づきを目標達成の中心におき、プロジェクトの前、最中、後に「critical thinking (批評的思考)」を用いて考えること。(6) 学生の考えを認め、ほめ、深めること。さらに、サービスマーケティングを推進するためには、それが、地域や学校のニーズとつながっており、サービスマーケティングの質を向上させようとする学校や地域政策に支えられているというような「組織的支援」が必要である。

次に「協働」は、「コラボレーション」とか「パートナーシップ」という言い方で使われることもある。一般的に「協働」とは、「複数の主体が、目標を共有し、ともに力を合わせて活動すること」を言う。近年、福祉、地域づくり、環境問題など様々な分野において「協働」ということばが使われており、「協働」が地域社会を考えていく上での一つの重要なキーワードになっている。ただ、「協働」ということばには厳格な定義があるわけではなく、場面に応じて実に様々な使われ方がされている。「協働」とは、お互いを自立した主体として認め合い、対等な関係を維持しつつ連携・協力することであるとする考え方もある。さらに、「協働」を組織対組織の関係における連携・協力であるとする考え方もある⁽⁴⁾。

教科「バーチャル・カンパニー演習」を「協働型サービスマーケティング」の場としていく目的と期待されるその効果としては、(1) 短大の1、2年生を対象に実施することで、学生一人ひとりが自らにとって将来必要な学習の意味を確認し、地域や社会問題への関心を広げ、グループでの協同学習で基礎的な力をつける。(2) 実践的な情報技術教育への導入教育としてモチベーションを高めるとともに、IT環境への理解を深め、より実践力の高い専門職養成を図る。

(3) 大学と地域団体との連携によるコミュニケーション教育プラットフォームを構築するこ

とで、効果的な協働型サービスラーニングのプログラム開発および評価体制を構築する、ことなどがある。その実現のために、あえて、地域団体や関連団体との連携の強化を図り、この教科の授業展開が、単に「学生間のコミュニケーション力強化」だけに終わることなく、実働する社会との関わりを持たせつつ「社会とのコミュニケーション力強化」プログラムとなるように授業展開の実験を重ねていく必要がある⁽⁴⁾。

2. 問題意識

著者が所属する名古屋女子大学短期大学部生活学科生活情報専攻(以下、本専攻という)では、短期大学としての実践的な職業教育の提供に加え、学生(定員1学年80名)の学習意欲を向上させ、さらに、多様な価値観を持つ人々との協力や協働ができる人材の育成のために、コミュニケーション力を高めることができるような特色ある教育システムを構築する試みを、2001年からいろいろと実施してきた^{(5)～(33)}。

それまでの本専攻での情報教育現場では、おもに『実践的技術教育』が主体で、まずは個人的にいろいろな技術や知識を身につけることに主眼が置かれていたが、それまで「個」を主体としてきた「技術習得教育環境」に「共創」意識を促すための『人間性・社会性共育』環境の実現を試行し始めた(「教育」と「共育」の2つの「きょういく」の実現)。

その試みが、実際に「人と人とを接触させる機会」の提供であり、それが「ITを仲立ちとした人と人との各種交流プログラム」(ハートライブ・プログラム)であるが、その目的としては3つの機会の提供を設定した。すなわち、①学生自身が他の学生や地域の人々と実際に触れ合う機会、②実践的に自分の力を試せる機会、③学生が主体となって運営する機会、である。この3つの機会を学習環境として多く体験させ、『自信力と自分力』を身に付けさせることを目指している⁽¹²⁾。

2つの『きょういく(教育と共育)』のうち、「きょういく(共育)」については、2004年度から実施している『ハートライブ・プロジェクト』をその試行のための中心と位置づけて取り組んできた。『ハートライブ・プロジェクト』とは、IT機器の利用が日常化するにつれて、バーチャルな人間関係が表面化してきたように思われる考えから、IT機器は人と人とのコミュニケーションに効果的に用いられるべきではないかという方向性の中で、「ITを仲立ちとした人と人との各種交流プログラム」(ハートライブ・プログラム: Heart-Live Program)を短大での2年間にわたり、カリキュラムの内外で継続的に提供しようとするものである⁽¹²⁾。

その一環として2005年4月より、週に1回『ハートライブ・セッション』という、1、2年共通の時間帯を、時間割の一部として組み込んで、『バーチャル・カンパニー』の活動や、コミュニケーション力育成のためのセミナーなどの実施に利用してきた。2006年4月からは、教科『バーチャル・カンパニー演習』(入門・基礎・実践・応用)をカリキュラムに設置し、1年から2年までの4セメスタを利用して『ハートライブ・プログラム』の1つとして、カリキュラムの中で提供できる環境を整えた。この教科は、現在、1、2年生相互や社会人との協働を通して1つのイベントを企画・運営させようとする内容となっており、目標となるイベントを毎年2月に開催する『春待ち小町(はるまちこまち)』と位置づけ、その実現に向けての授業展開をしている⁽⁶⁾。その際に設定したのが、①学年を超えた学生間の協働、②専攻を超えた学生間の協働、③学生と教員との協働、④学生と地域社会人との協働の4つの協働であり、イベントの実現に向けて、必要な業務を「ユニット」としてチーム化し、「ユニット」には、1、2年の各学生と教員を配置している。さらに、履修学生の約半数により構成されるメインとな

る1つの「ユニット」には、地域貢献ボランティアを育成する地域団体との協働を義務化し、授業時にも、当該地域団体とのやり取りや調整を通して業務を推進するようにしている。

こうした取り組みに類似した教育プログラムが他にあるのであろうか。

上智短期大学（神奈川県秦野市）のサービ斯拉ーニング活動は、「社会参加、実践を通じた学外での学びと、授業などの学内での学びの融合」である。学生は、学内で児童英語教育、日本語教育、ボランティア論、多文化主義論などを学び、そして学内で学んだ知識を基に、学外の地域社会において奉仕（サービス）活動を行う。たとえば、地域の小学校国際教室での日本語教育支援、地域の外国籍市民を対象とした日本語・教科支援ボランティアコミュニティフレンドなどである。また、地域社会での奉仕活動をアカデミックな学内での学びと関連させ、地域から得られた体験を振り返り、社会性を核としたさまざまな能力を育てていく学習プロセスである⁽³⁴⁾。ここでいうサービ斯拉ーニングとは、地域社会での奉仕活動をアカデミックな学内での学びと関連させ、地域から得られた体験を省察し（振り返り）、社会性を核とした様々な能力を培っていく学習プロセスである。サービ斯拉ーニングのプログラムを通し、学生の社会人基礎力を育て、ライフデザインの形成を支援してゆく。「学外での学び」としては、①日本語・教科支援ボランティアコミュニティ・フレンド、②日本語教育ボランティア、③英語教育ボランティア、④高校学習支援ボランティア、⑤秦野青年会議所主催ボランティア、⑥メンタルフレンドボランティア、⑦ハロウィン仮想行列ヘルパー、⑧南地区敬老会ボランティア、⑨秦野たばこ祭りボランティア、⑩インターナショナルフェスティバル・ボランティア、⑪地域安全運動・交通安全運動推進事業ボランティアなどがある⁽³⁵⁾。

新見公立短期大学（岡山県新見市）では、「新見まごころネット」、「サテライト・デイ」の短大の2つの地域貢献活動を、看護を学ぶ学生たちの教育の場とするサービ斯拉ーニングの取組を行っている。これらの活動は、新見市の在宅高齢者を対象に健康相談・生活支援を柱とし、2003年に開始したICTネットワークによる健康相談活動「新見まごころネット」と、2004年に開始した高齢者の生活圏内での地域分散型デイサービスを目指した介護予防活動「サテライト・デイ」の2つの取組を基盤にしている。この取組は、参加する高齢者や支援団体との連携を通して、地域の人々の教育力を十分に活かしながら、地域住民と共に学生を育てることをめざすものである。看護学科の教育目標は、高度な専門性に基づいた看護実践能力を持った学生を育成することにある。「知る」から「分かる」、そして「行動する」という看護実践能力を修得させるために、基礎的知識・技能の習得から始め、フィールドワーク、体験学習、ボランティア活動、そして看護の対象となる人々への実践的な実習へと学習活動を段階的に展開している。このサービ斯拉ーニングの取組は、学生と教員が独自に企画、運営するという点で、他のフィールドワークと異なり、主体的で創造的な実践能力を養うことができる⁽³⁶⁾。

自由が丘産能短期大学（東京都世田谷区）で実施されている教科「サービ斯拉ーニング」は、早くから米国で取り入れられてきた体験的教育を基礎としたサービ斯拉ーニングという教育手法を用いた授業である。この科目の開発にあたっては、①サービ斯拉ーニング活動の根幹として、建学の精神に基づいた授業プログラムとすること、②必修科目との連携を考慮すること、③学内活動に参加している学生には履修を強く勧めるという点を基本方針とした。また、この科目の実施時期としては、1学年の後学期とした。これらの基本方針をもとに、到達目標や授業スケジュール、教育方法を次のように設定した。到達目標としては、①サービ斯拉ーニングについての基本的な知識を理解することができる。また、ピアサポート、ボランティアなどの活動について理解し、イメージすることができる。②自分とは違うさまざまな人の考えや立場

に、気づくことができるようになる。③建学の精神を理解し、この建学の精神に基づいたサービラーニングなどについて考えることができるようになる、とした。授業スケジュールおよび学習内容は、サービラーニング、ピアサポート、ボランティアに関するグループワークを中心としたものである。教育方法に関しては、講義は最小限の基礎知識の解説にとどめ、グループ討議・演習を中心に進めることとした。また、自分が属するコミュニティである大学や大学周辺の地域などの身近な課題を解決するための目標を設定し、その目標を達成するための計画をグループメンバーと協力して行う演習を取り入れるなど、学生による自主的な活動を支援するようにした。なお、「サービラーニング」科目を導入している他大学と同様、学習や活動を実際に行った後の「振り返り」を重視するようにした。このサービラーニングの「振り返り」は、米国や日本における事例においても、サービラーニングの実践ステップの中の重要な構成要素として実施されていた。そこで、この授業プログラムにおいても、毎回授業の終わりに、その授業回で学習したことや気づいたこと、感じたことなどを「振り返りシート」として言語化し、まとめさせるようにしている⁽³⁷⁾。

国際基督教大学（東京都三鷹市）の「サービラーニング」は、学生が自発的な意志のもとについて一定の期間、社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取り組みや進路について新たな視野を得る新しい教育プログラムである。「国際サービラーニング」、「コミュニティ・サービラーニング」などの授業を決められた履修手順で学び、サービス活動を行うことによって単位が与えられる。「国際サービラーニング（国際S-L）」は、海外でのサービス活動や、国際的な活動をしている国内の非営利機関や公的機関でサービス活動を行う。原則として、各自が受入機関を探し、受入のアレンジを行うが、大学を通してパートナー機関等で活動を行うこともできる。学生が自ら関心のある分野の国際NGOや国際機関を自分で探し、インターンシップやボランティアの可能性を交渉・申請し、国内外でサービス活動を行う例としては、京花女子高等学校（韓国）、JICAバプアニューギニア小規模農家稲作振興プロジェクト、東京―フロストバレーYMCAパートナーシップ（アメリカ）、特定非営利活動法人カンボジア・NGOなどがある。「コミュニティ・サービラーニング」は、国内のNPO/NGO、公共機関、地域社会などでサービス活動を行うもので、1999年にスタートした。もっとも身近な地域社会である三鷹市役所、墨田区の児童厚生施設・興望館、栃木県那須塩原市の農村指導者育成機関・アジア 学院など、原則として学生がサービス活動を行う機関を主体的に選び、交渉するが、大学と協定・提携関係にある機関でのサービスをアレンジすることもできる⁽³⁸⁾。

方 法

他校のプログラム事例と比較すると、本専攻のプログラムに特徴的なのは、学外での活動における協働型サービラーニングの実践ではなく、それを学内で実施するイベントにより実践している点である。履修者全員に年度ごとに実践の場を継続して提供できる点に意義があり、ノウハウなどを学内に蓄積することができる。しかしながら、企画を進める上で、必要に応じて外部の社会人と交渉をすることにより「社会との交流」を図ることはできるが、協働とは言えない。その課題を解決するために、2007年度の「バーチャル・カンパニー演習」の開始当初は、すべての学生が、地域団体や自治体などの社会人と交渉しながら作業を進める方式をとつ

た。これの実現には、授業時間に合わせて学生を受け入れることや、学生を指導しながら作業を進めるなど、相手側社会人にこの取り組みに対する相当の理解や協力体制が必要とされた。その方式により、「社会との協働」は実現できたものの、第2回、第3回と回を進めるうちに、協力団体の辞退が進み、2010年度の第4回実施時には、協働体制で授業を進めることに協力する団体は、1団体を残すのみとなってしまう。2011年度の第5回のイベント開催に向けては、5つの各ユニットに配置した5人の各担当教員を社会と見立てたうえで交渉をシミュレーションする形態となっている。ただ1つのユニットについては、地域貢献ボランティアの育成を目的とする地域団体と1名の教員と学生によるユニットが実現しており、このユニットでは、企画内容自体やその実現に向けて、逐次地域団体と交渉を重ねながら協働で推進する形態をとっている。

その意味で、このプログラムに不足する「社会との協働」や学生の「自発的な行動」を保証するために、2011年度からは、新たに、地域貢献ボランティア活動を目的とする外部団体と連携して、地域貢献ボランティアの育成のためのセミナー（「社会人基礎力」の育成を含む）への参加や、実際の地域貢献ボランティア活動への参加をあっせんする活動を実験的に始めた。

なお、こうしたプログラムを教科として提供することにより、評価方法の検討も必要になってくるが、その基準の一つとして、経済産業省の「社会人基礎力」を利用できないかという検討を始めた。「社会人基礎力」には、3つの能力と12の能力要素があり、3つの基礎能力とは、①前に踏み出す力、②考え抜く力、③チームで働く力である。また、12の能力要素は、①主体性、②働きかけ力、③実行力、④課題発見力、⑤計画力、⑥創造力、⑦発信力、⑧傾聴力、⑨柔軟性、⑩状況把握力、⑪規律性、⑫ストレスコントロール力である⁽³⁹⁾。（表1）

そして、それらは能力自体として把握することは難しいとしながらも、成果に向けた行動として発揮されることで把握し易くするとしている。したがって、社会人基礎力を自覚したり、自己や他者を評価する場合、まずは表れた行

表1 社会人基礎力としての3つの能力と12の能力要素⁽³⁹⁾

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ目的に向かって周囲の人を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のもの何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見を分かりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

動を事実として正確に捉えることが基本になる。この場合、能力要素の定義や発揮具合によってあらかじめ設定されたレベル評価基準などがあれば、その基準と実際にとられた行動や成果とを照らし合わせることにより、その人の各能力要素がどのレベルなのかを判断することができる。社会人基礎力を育成する教育の中で行われるべき評価は、まさにこれである。また、評価手法は、できるだけ学生が自ら自分の行動のあり方に気づき、行動変容を起こすことを促すようなものであることが重要である。そのポイントは、次のとおりである。①行動は、1つ1つ事実としてとらえる。②どのようなことができるようになったのか、行動事実により気づかせる。③信頼関係を構築する。④フィードバックを重視する。

評価は、当人に納得感を持って受け止められることで効果を発揮する。本人へのフィードバックを当初から意識して評価プロセスを構築することが重要である^{(40)～(42)}。

結果と考察

本プログラムの評価方法の一つとして、「社会人基礎力」の育成に着眼することにしたが、その方向性を検討するために、2011年度4月入学生に対して「社会人基礎力」に対する意識などを調査した（2011年4月調査）。

項目は大きく分けて2つのカテゴリーで構成しており、いずれも「社会人基礎力」の3つの能力と12の能力要素についてそれぞれのことを問うものであるが、1つは、直接的にその12の能力要素を明記せずに、それらの能力要素の有無を引き出すような設問によるものであり、もう1つは、直接的に3つの能力と12の能力要素を明示して、自分自身のそれらの能力の有無を問うものである。さらに、「身につけたい能力」について、直接的に3つの能力と12の能力要素を明示した設問の3問である。調査対象は、70名である。なお各設問は、先行研究を参考に作成した⁽⁴³⁾。

設問1 『バーチャル・カンパニー演習』で、地域貢献イベント『春待ち小町』に向けて、人と協力しながらのグループ活動を行っていくにあたって、『現在』（取り組みを始める前）の自分自身の行動や態度、気持ちなどについてお聞きします。これまでの自分自身の行動などを振り返って、自分自身にあてはまるものを4段階の中から選んで○をつけてください。

設問2 職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力のうち、特に『社会人基礎力』については、『3つの能力と12の能力要素』が求められます。それらの一つひとつの能力が自分にあるかどうかについて、現在の自分自身にあてはまるものを4段階の中から選んで○をつけてください。

設問3 『社会人基礎力』の『3つの能力と12の能力要素』について、イベント『春待ち小町』の活動を通して身につけたい能力について、自分自身にあてはまるものを4つの中から選んで○をつけてください。

「社会人基礎力」には、3つの能力と12の能力要素があるが、設問1においては、それぞれの能力要素の有無を引き出すべく設問を設定した（各能力要素につき3～5問）。また、設問2と3においては、次の各項目の簡単な説明と例を示し、自分自身にあてはまるものを選択させた。実際の設問内容と結果は次のとおりである。なお、回答は、1. 非常にあてはまる、2. ややあてはまる、3. あまりあてはまらない、4. まったくあてはまらないの4段階で、選択された回答に対する点数をそれぞれ4、3、2、1で採点し平均したものである。問の後に記

載の数字がそれぞれの平均値で、3つの能力と12の能力要素の後に記載の数字が、順に設問2、設問3の平均値である。

1. 前に踏み出す力（一步前に踏み出し、失敗しても粘り強く、取り組む力）2.99、3.84

①主体性（物事に進んで取り組む力）2.41、3.74

問1 「人と協力して行うグループ活動の活動や打ち合わせには、休まず参加する。」3.27

問2 「人と協力して行うグループ活動で決まった自分の分担は、進んで作業をすることができる。」3.30

問3 「いろいろな制作場面において、自分の担当以外のことにも積極的にかかわる。」2.48

問4 「人と協力して行うグループ活動の中で、リーダーとメンバーの役割を理解したうえで、自分の役割をこなすことができる。」3.06

②働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）2.30、3.54

問1 「1つ以上のアイデアがあるときには、自分が中心となって全体を調整してまとめる。」2.08

問2 「人と協力して行うグループ活動の運営をするとき、積極的に参加しないメンバーに参加を呼びかけることができる。」2.16

問3 「自分のグループ以外の仕事も、サポートすることができる。」2.77

問4 「人と協力して行うグループ活動の目的達成のために、教員や学外の人に説明や協力依頼ができる。」2.51

③実行力（目的を設定し、行動する力）2.61、3.79

問1 「人と協力して行うグループ活動の中で、今までやったことのないことでも、新しく始めることに抵抗がない。」2.64

問2 「人と協力して行うグループ活動で、初めて会うために話しかけにくい時でも、勇気を出して話しかける。」2.64

問3 「自分の担当する作業は、最後まできっちりやり遂げる。」3.43

問4 「人と協力して行うグループ活動の作業で、気分が乗らないときでも、欠席したりせずに頑張って取り組む。」3.27

2. 考え抜く力（疑問を持ち、考え抜く力）2.58、3.56

④課題発見力（現状を分析し、目的や課題を明らかにする力）2.40、3.59

問1 「人と協力して行うグループ活動での問題点に気づき、対策が必要だと感じることもある。」2.69

問2 「人と協力して行うグループ活動の運営での課題を自分なりに考え、改善策を考えることができる。」2.30

問3 「人と協力して行うグループ活動のメンバーが作業上困っていたら、何が問題点かを見出して、相手にアドバイスできる。」2.63

問4 「人と協力して行うグループ活動の運営の中での課題が見つかった時、メンバーで話し合って改善策を考えることができる。」2.99

⑤計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）2.55、3.64

問1 「人と協力して行うグループ活動での作業を始める前に、いつまでに終わらせなければいけないかを考える。」3.23

問2 「人と協力して行うグループ活動全体のスケジュールを把握したうえで、自分の作業スケジュールを立てることができる。」2.69

問3 「人と協力して行うグループ活動での作業が重なっても、自分で優先順位をつけて行動計画が作れる。」2.67

問4 「人と協力して行うグループ活動で発生する作業や予算の管理、学外活動での日程計画や調整などができる。」2.62

⑥創造力（新しい価値を生み出す力）2.48、3.67

問1 「人と協力して行うグループ活動においては、今までにあるものをまねるより、一から自分で考える。」2.31

問2 「人と協力して行うグループ活動の中で、友人が取り組んでいるものを見て、新しいアイデアを思いつくことができる。」2.37

問3 「創意工夫をメンバーと協議して行うことができる。」2.68

3. チームで働く力（多様な人々とともに、目標に向けて協力する力）3.07、3.64

⑦発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）2.40、3.81

問1 「人と協力して行うグループ活動での打ち合わせでは、自分から発言、提案をすることが多い。」2.17

問2 「学外の人に自分たちの人と協力して行うグループ活動を説明することができる。」2.20

問3 「人と協力して行うグループ活動に必要なレポートには、調べた事以外に自分の意見を書くことができる。」2.51

⑧傾聴力（相手の意見をていねいに聴く力）2.81、3.67

問1 「人と協力して行うグループ活動においては、自分の話をする前に、まず人の話を聞くとする。」3.23

問2 「人と協力して行うグループ活動の中で、だれかに質問するとき、自分の話す言葉より、多く相手に話してもらえるように心掛ける。」2.41

問3 「メンバーのアドバイスを取り入れて、自分の担当の作業（内容ややり方）を改善する。」3.11

問4 「インタビュー用紙を作って（使って）、学外の人に話を聞くことができる。」2.21

⑨柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）3.01、3.67

問1 「人と協力して行うグループ活動の中で、自分が良く知らない話題を話す人とも、会話を続けることができる。」2.59

問2 「人と協力して行うグループ活動の中で、苦手な人や初対面の人にも進んで話しかけることができる。」2.48

問3 「企画や制作において、急なスケジュールの変更にもあわてないで対応できる。」2.75

問4 「人と協力して行うグループ活動の中で、作業がうまく進まない場合は、友人や教員に相談して、アドバイスをもらい、やり方を変えることができる。」3.04

⑩状況把握力（自分の周囲の人々や物事との関係性を理解する力）3.06、3.66

問1 「人と協力して行うグループ活動の中で、相手が忙しそうな時には、時間をおいて話しかける。」3.30

問2 「人と協力して行うグループ活動の中で、急いで結論を出さなければいけないと判断したときには、素早く対応することができる。」2.45

問3 「人と協力して行うグループ活動の中で、もう少し話をしていたくても、周囲の人（教員や友人）が急いでいるときは、状況を見ながら行動する。」3.21

問4 「人と協力して行うグループ活動の作業状況をしっかりと把握し、その進み具合を教員

やメンバーに説明できる。」2.54

⑪規律性（社会のルールや人との約束を守る力）3.05、3.71

問1 「人と協力して行うグループ活動の中で、教員・職員・先輩あるいは外部の人と話をするときには敬語を使って話す。」3.61

問2 「人と協力して行うグループ活動を通して、その場の状況に応じた話し方のマナーに気を使う（一方的に話したり、自分中心であったり、声・口調が乱れたりはしない）」3.06

問3 「人と協力して行うグループ活動の中で、教員やメンバーに対して報告や連絡がしっかりできる。」2.97

問4 「人と協力して行うグループ活動で決めたルール（期限・やり方・役割等）や自分で決めたルールを守ることができる。」3.27

⑫ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）

2.48、3.70

問1 「人と協力して行うグループ活動での提出物の締め切りが迫った時、苦しい場面や状況でも放り出してしまうことはない。」

3.31

問2 「人と協力して行うグループ活動の中で、一度くらい失敗しても、くよくよしないで再びチャレンジしていく。」2.77

問3 「人と協力して行うグループ活動の中で、だれかに反対意見を言われた時でも、くじけてやる気をなくしてしまうということはない。」2.81

問4 「人と協力して行うグループ活動での作業がうまくいかない場合は、作業を止めて気分転換して、再度落ち着いてから再開できる。」2.96

問5 「人と協力して行うグループ活動の中で、困ったときや苦しい時に、メンバーや教員に相談することができる。」2.90

これらの結果を一覧にすると、表2のようになる。また、傾向を示すグラフが図1である。2011年度入学生の全体の傾向として、12の能力要素を引き出す設問では、12の能力要素のうち「規律性」が一番高く（3.23）、以下、順に「主体性」（3.03）、「実行力」（2.99）、「ストレスコントロール力」（2.95）、「状況把握力」（2.87）、「計画力」（2.80）、

表2 新入学生の「社会人基礎力」についての傾向

	設問1	設問2	設問3
前に踏み出す力	—	2.99	3.84
主体性	3.03	2.41	3.74
働きかけ力	2.38	2.30	3.54
実行力	2.99	2.61	3.79
考え抜く力	—	2.58	3.56
課題発見力	2.65	2.40	3.59
計画力	2.80	2.55	3.64
創造力	2.45	2.48	3.67
チームで働く力	—	3.07	3.64
発信力	2.29	2.40	3.81
傾聴力	2.74	2.81	3.67
柔軟性	2.71	3.01	3.67
状況把握力	2.87	3.06	3.66
規律性	3.23	3.05	3.71
ストレスコントロール力	2.95	2.48	3.70
平均	2.76	2.68	3.68

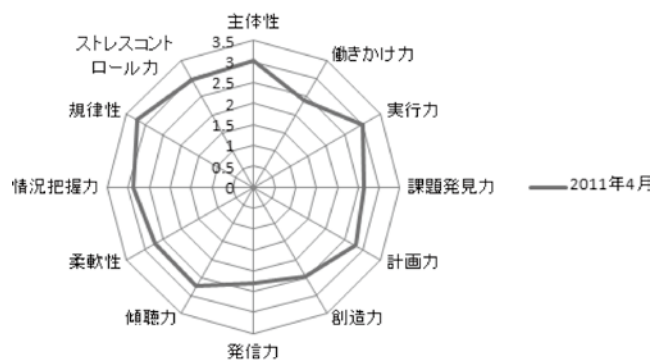


図1 新入学生の「社会人基礎力」についての傾向

「傾聴力」(2.74)、「柔軟性」(2.71)、「課題発見力」(2.65)、「創造力」(2.45)、「働きかけ力」(2.38)となっており、最も低い能力は、「発信力」(2.29)である。

3つの能力と12の能力要素の項目内容と簡単な説明を見て自己判断する設問では、「自分にその能力がある」要素としては、「チームで働く力」が一番高く(3.07)、以下、順に「状況把握力」(3.06)、「規律性」(3.05)、「柔軟性」(3.01)、「前に踏み出す力」(2.99)、「傾聴力」(2.81)、「実行力」(2.61)、「考え抜く力」(2.58)、「計画力」(2.55)、「創造力」(2.48)、「ストレスコントロール力」(2.48)、「主体性」(2.41)、「課題発見力」(2.40)、「発信力」(2.40)となっており、最も低い能力は、「働きかけ力」(2.30)である。

『春待ち小町』の活動を通して「身につけたい」能力としては、「前に踏み出す力」が一番高く(3.84)、以下、順に「発信力」(2.81)、「実行力」(3.79)、「主体性」(3.74)、「規律性」(3.71)、「ストレスコントロール力」(3.70)、「柔軟性」(3.67)、「傾聴力」(3.67)、「創造力」(3.66)、「状況把握力」(3.66)、「チームで働く力」(3.64)、「計画力」(3.64)、「課題発見力」(3.59)、「考え抜く力」(3.56)となっており、最も平均値の低い能力は、「働きかけ力」(3.54)である。

特に、これらの結果を自己判断による12の能力要素を基準としてみると、表3のようになる。その能力が『ある』と自覚している上位5位までの能力要素は、実際にも「ある」と思われる結果が出ているが、なかでも「規律性」と「実行力」、「状況把握力」については、自覚とテストの結果が一致方向である。「傾聴力」と「実行力」については、「ある」と自覚するものの、実際にはその能力要素が備わっていない可能性が高い。「状況把握力」については、「ある」という自覚にもかかわらず、さらに「身につけたい」と考えている。

逆に、その能力が『ない』と自覚している上位5位までの能力要素は、実際にも「ない」と思われる結果が出ているが、なかでも「働きかけ力」と「発信力」、「課題把握力」については、自覚とテストの結果が一致方向である。「主体性」と「ストレスコントロール力」については、「ない」と自覚するものの、実際にはその能力要素が備わっている可能性が高い。「発信力」と「主体性」については、「ない」という自覚にもかかわらず、「身につけたい」とも思っていない。

以上のように、教科『バーチャル・カンパニー演習』に取り組む前の状況を『社会人基礎力』の3つの能力と12の能力要素を基準として把握してみた。これを、実際にこの教科を終えた段階にもデータを採集して、比較検討を行うことにより、この教科の評価ツールの一つとして利用可能かどうか判断できるに違いない。

いわゆる教科「バーチャル・カンパニー演習」を中心とした「協働型サービスラーニング」と「ハートライブ・プロジェクト」を在学期間の核に据え、カリキュラムの内外で、人と協働して実現していく過程を体験的に学べるような各種プログラムを提供していくが、そこでは、「自己形成力」、「コミュニケーション力」、「社会人基礎力」を身に付けさせ、ボランティア精

表3 「社会人基礎力」の「自己判断」を基準にした傾向

あると思われる	あると思う(自己判断)	身につけたいと思わない
規律性	状況把握力	発信力
主体性	規律性	実行力
実行力	柔軟性	主体性
ストレスコントロール力	傾聴力	規律性
状況把握力	実行力	ストレスコントロール力
計画力	計画力	傾聴力
傾聴力	創造力	柔軟性
柔軟性	ストレスコントロール力	創造力
課題発見力	主体性	状況把握力
創造力	課題発見力	計画力
働きかけ力	発信力	課題発見力
発信力	働きかけ力	働きかけ力
無いと思われる	無いと思う	身につけたいと思う
設問1	設問2	設問3

神も身につけさせる。その育成が効果的に行われるために、「自己発見」と「キャリア支援」および「学習ポートフォリオ」（専攻教員共有の学生の電子個人カルテ）と「学生生活支援サイト」を強化し、連携を図りながら、在学時の各学生の成長とその過程を追跡し、卒業に至る学生の満足度の向上

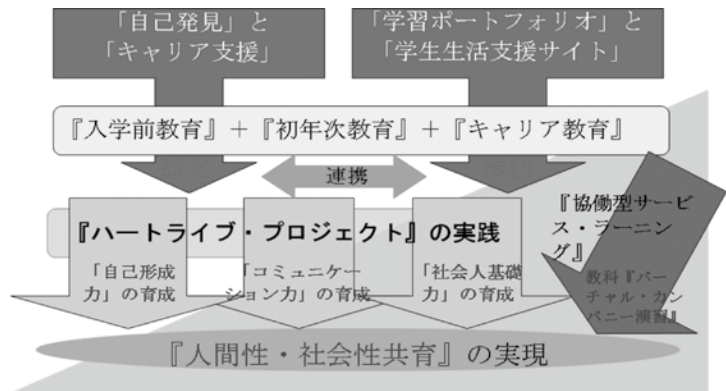


図2 学生の期待と意欲に応える教育環境の実現へ⁽¹⁾

に寄与させるものである。その際、「入学前プログラム」と「初年次教育プログラム」、そして「キャリア教育プログラム」を一貫した流れの中で展開する。

2011年度の入学生に対しては、図2中の「協働型サービスラーニング」の強化を図るために、地域の地域貢献ボランティア団体と連携して、課外活動としてのセミナーによる「ボランティア」と「社会人基礎力」の育成プログラムと「学外での実践」プログラムとしての地域貢献ボランティア活動への仲介を実験中である。この取り組みに参加する学生は、いわゆる「サービスラーニング」の核心の一つともいえる学生本人の自発的な参加が期待できるものであり、これらのプログラムを利用した学生と利用しない学生が同じく教科「バーチャル・カンパニー演習」を経て、どのように成果の違いが出てくるのか、その見極めも進めながら、より特色のある教育システムの構築に結び付けたいものである。いずれにしても、他校でのこうした取り組みがあまりみられない中で、本専攻の学生のコミュニケーション力や「社会人基礎力」の育成に結び付き、よりよい効果が発揮される取り組みにしていきたいと考えている。

要 約

情報系短大生を対象に、「協働型サービスラーニング」の手法の導入を進めている。その多くが、「学内での学び」を基にして、学生の「自発性」と「ボランティア精神」による「学外での学び」を保証する取り組みであるが、本専攻のプログラムの特徴は、学外での活動における協働型サービスラーニングの実践ではなく、それを学内で実施するイベントにより実践している点である。履修者全員に、年度ごとに実践の場を継続して提供できる点に意義があり、ノウハウなどを学内に蓄積することができる。しかしながら、企画を進める上で、必要に応じて外部の社会人と交渉をすることにより「社会との交流」を図ることはできるが、協働とは言えない。その解決のための試行を進めると同時に、このプログラムを経験することによる学習効果を検討するために、「社会人基礎力」に注目し、指標としての導入を目標に、2011年度の入学直後の段階での学生の「社会人基礎力」についての現状調査を行った。「社会人基礎力」の12の能力要素についてのこの調査の結果から、「働きかけ力」、「課題発見力」については身に付けたいと重視しており、「発信力」、「実行力」、「主体性」については、自己判断で「無い」

と思いながらも身に付けたいとも思わない傾向が現れた。

参考文献

- 1) <http://www.n-fukushi.ac.jp/gakubu/fukushi/gp/gp2.html> (日本福祉大学)
- 2) 川田博美、箕浦恵美子 (2011): “協働型サービスラーニングの実現に向けての教育システム構築の可能性”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第57号、pp.237-250
- 3) 川田博美、箕浦恵美子、佐藤優 (2011): “協働型サービスラーニングを目指す教科に求める学習効果”、教育システム情報学会第36回全国大会講演論文集、pp.398-399
- 4) 川田博美、稲吉由味子、千葉みどり (2011): “地域貢献ボランティア活動とリンクした「社会人基礎力」を育成する教育プログラム導入の試み”、教育システム情報学会第36回全国大会講演論文集、pp.396-397
- 5) 川田博美、箕浦恵美子、佐藤優 (2010): “イベント実施により協働型サービスラーニングを目指す教科の展開”、教育システム情報学会第35回全国大会講演論文集
- 6) 川田博美、佐藤優 (2010): “協働型サービスラーニングを目指す「バーチャル・カンパニー演習」の試み”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第56号、pp.137-149
- 7) 川田博美 (2009): “ブログを活用した授業内容配信システムの活用と課題”、教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集
- 8) 川田博美 (2008): “『春待ち・小町』咲き誇れ「こころ花」、届け「私ごころ」『開かれた地域貢献事業』～「学生の感性とコミュニケーション力を育む『音と光のフェスティバル』プロジェクト」～”、総合科学研究第1号、名古屋女子大学総合科学研究所
- 9) 川田博美 (2008): “ブログを活用した授業内容配信システムの試み”、教育システム情報学会第33回全国大会講演論文集
- 10) 川田博美 (2007): “国家試験が一部免除になる『あいちIT人材育成特区』に対応したカリキュラムへの取り組み”、日本教育情報学会第23回年会論文集
- 11) 川田博美、森屋裕治、鷺野友美 (2007): “「あいちIT人材育成特区」認定に対応したカリキュラム構築の試み”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第53号
- 12) 川田博美 (2007): “ITを仲立ちとした人と人とのコミュニケーション教育へのブログ活用のための基礎実験”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第53号
- 13) 川田博美 (2007): “ブログを活用した学習環境と学生とのコミュニケーション環境実現への試み”、教育システム情報学会第32回全国大会講演論文集
- 14) 川田博美 (2006): “ITを仲立ちとした人と人とのコミュニケーション教育へのブログ活用の試み”、日本教育情報学会第22回年会論文集
- 15) 川田博美 (2006): “ブログを活用した生活支援の試み”、教育システム情報学会第31回全国大会講演論文集
- 16) 川田博美、武岡さおり、森屋裕治、鷺野友美 (2006): “『あいちIT人材育成特区』に対応したカリキュラムについて”、平成18年度情報処理教育研究集会講演論文集
- 17) 川田博美、武岡さおり、森屋裕治、鷺野友美、小山幸治、田口継治 (2005): “情報系短大における『習熟度別クラス編成』による情報教育の取り組み”、平成17年度情報処理教育研究集会講演論文集
- 18) 川田博美 (2005): “短期大学におけるITを仲立ちとした人と人とのコミュニケーション教育の試み”、日本教育情報学会第21回年会論文集
- 19) 川田博美、武岡さおり、鷺野友美、小山幸治 (2005): “短期大学における学生の運営によるバーチャル・カンパニーの試み”、教育システム情報学会30周年記念全国大会論文集
- 20) 川田博美、森屋裕治、西尾尚子、小山幸治、田口継治 (2005): “習熟度別クラス編成による効果的な情報教育への取り組み－事前アンケートに見る学生の推移－”、名古屋女子大学紀要 (人文・社会編) 第51号、pp.35-45
- 21) 川田博美 (2004): “地域との連携による『パソコンインストラクター実習』の試み”、『電子情報通信学会信学技報ET2004-6』、pp.47-52
- 22) 森屋裕治、川田博美 (2004): “情報系短大のカリキュラムに関する戦略策定の試み”、日本教育情報学会第20回年会論文集
- 23) 川田博美、武岡さおり、森屋裕治 (2004): “そのすべてを学生の手により実施する教科『パソコン・イン

- ストラクチャー実習』の試み”、日本教育情報学会第20回年会論文集、pp.268-271
- 24) 川田博美、武岡さおり、田口継治、杉村藍、尾崎正弘（2003）：“能力別クラス編成による効果的な情報教育の実施について”、『教育情報研究』第19巻第2号、pp.17-26
- 25) 田口継治、川田博美、武岡さおり、杉村藍、西尾尚子、滝下治里、加藤恵子、尾崎正弘（2003）：“能力別クラス編成とインターネットを利用した教育指導方法の実験について”、名古屋女子大学紀要 人文・社会編第49号
- 26) 尾崎正弘、武岡さおり、川田博美、小山幸治、足達義則（2002）：“個別学習によるハイパーテキスト「シスアドブック」の開発”、教育システム情報学会第27回全国大会講演論文集、pp.305-306
- 27) 川田博美、武岡さおり、滝下治里、田口継治、尾崎正弘（2002）：“能力別クラス編成による効果的な情報教育カリキュラム実現の試みについて”、日本教育情報学会第18回年会論文集、pp.246-249
- 28) 小山幸治、武岡さおり、川田博美、尾崎正弘、足達義則（2002）：“理解度向上支援総合ネットワーク型教育システムの構築－データ構造に着目したDBの構築－”、日本教育情報学会第18回年会論文集、pp.254-257
- 29) 田口継治、川田博美、武岡さおり、尾崎正弘（2002）：“インターネットを利用した教育指導方法の実験について”、教育システム情報学会第27回全国大会講演論文集、pp.335-336
- 30) 川田博美、尾崎正弘、江島徹郎、足達義則（2002）：“CAI教育に適応したクライアント・サーバシステムの開発”、名古屋女子大学紀要 家政・自然編第48号、pp.113-120
- 31) 小山幸治、武岡さおり、川田博美、尾崎正弘、足達義則（2002）：“理解度向上支援総合ネットワーク型教育システムの構築－データ構造に着目したDBの構築－”、日本教育情報学会第18回年会論文集、pp.254-257
- 32) 武岡さおり、尾崎正弘、川田博美、岩下紀久雄、江島徹郎、足達義則（2002）：“学習者の理解度を考慮したハイパーテキスト型CAI教材の試作”、名古屋女子大学紀要 家政・自然編第48号、pp.177-186
- 33) 武岡さおり、尾崎正弘、川田博美、岩下紀久雄、江島徹郎、足達義則（2001）：“学習者の理解度を考慮したハイパーテキスト型CAI教材の開発”、日本教育情報学会第17回年会、pp.232-235
- 34) 大瀬浩子（2011）：“地域レベルにおける協働についての一考察 ～秦野市と武蔵野市を事例として～”、Sophia Junior College Faculty Journal Vol. 31, 2011, pp.72。
- 35) <http://www.jrc.sophia.ac.jp/servicelearning/index.php>（上智短期大学）
- 36) http://www.niimi-c.ac.jp/school/gp_18_1.html（新見公立短期大学）
- 37) 中村知子、藤原由美、三浦智恵子（2010）“サービスラーニング授業の開発”自由が丘産能短期大学紀要第43号、pp.19,20。
- 38) http://www.icu.ac.jp/liberalarts/service_1.html（国際基督教大学）
- 39) 経済産業省（2008）：『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、2008年7月30日、経済産業省。
- 40) 斎藤寧（2009）：“「社会人基礎力」の詳細定義－大学での具体的展開への若干の提言－”、比治山大学短期大学部紀要第44号、pp.22。
- 41) 経済産業省（2010）：『社会人基礎力育成の手引き』、2010年12月31日、朝日新聞出版。
- 42) 大久保幸夫（2004）：『仕事のための12の基礎力』、2004年5月24日、日経BP社。
- 43) http://www.nagoya-ku.ac.jp/gp/report_21/tool/（名古屋経済大学）